様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 １９ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３５０７０８

研究課題名（和文）身体運動の論理ー運動実践の現象学的分析ー

研究課題名（英文）Logic of Hman Movement : A phenomenological analysis of human movement practice

研究代表者
瀧澤　文雄（TAKIZAWA, Fimo）

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：５０１１４２９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、運動実践を現象学的に分析することによって、体育に不可欠な「身体運動の論理」を明示し体系化することである。人間の運動実践を支配する論理は，誰もが運動を実践する際に前提とすべき事柄である。
その身体運動の論理は四つに分類される。すなわち、物体としての運動を統御する論理、身体運動を意図的に作る論理、運動実践に必要な意図を持つための論理、さらに運動実践に必要な知を獲得し活用する論理である。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this research is to specify logic of human movement, which is necessary for physical education, by phenomenological analysis of human movement practice. The logic, which governs human movement practice, is a premised matter when everyone practices movement.
The logic of human movement is classified into 4 groups. That is the logic which controls movement of our physical body as an object, the logic which makes a human movement, the logic for having an intention required for practice, and the logic which gains human- bodily knowledge and utilize it.

研究分野：体育哲学

キーワード：身体教育学　現象学的分析　運動学　運動実践　論理

１．研究開始当初の背景

これまで筆者は身体論を中心に運動実践の研究を継続してきた。それは体育という教科において、児童・生徒に運動を教えるだけでなく、さらに生活を豊かにできる身体を教育するために必要となる研究である。この身体の教育を具体化するために、子どもにとって身体運動とは何かについて再考する必要が生じた。加えて、学校における児童・生徒の運動を指導するためには、個々人に対応できる具体的な運動学が必要となることが明らかになった。その運動学は、主体という概念を持ち込み、児童・生徒各々がどのような身体を保持し、何を意図して運動しているのか、を視野に入れた新たな運動学である。さらにそれは、科学的方法ではなく、意識を焦点に当てた現象学的分析方法を用いた運動学である。

新たな運動学の一領域としての現象学的運動学を提示するために、昨年（H.25）度までの 3 年間、「現象学的運動学の可能性－身体教育としての運動指導を目指して－」というテーマのもとに、その運動学独自の研究方法を含めて考察してきた。その概要は次の通りである。ドイツのクルト・マイネルによって提示されたスポーツ運動学は、科学的データになりにくい習得段階を設定し、運動の徴表をカテゴリーとして提示している。しかし、マイネル運動学の独自性に関わる研究はドイツ国内では注目されなくなった。このことの確認を含め、ドイツにおける運動学の研究動向を探るために、ライプチヒ大学図書館で資料を収集し、その際に複数の関連教授に面談した。日本においては、主に金子明友が日本におけるマイネル運動学を理論的にも実践的にも先導してきた。しかし、両者の研究は現象学的視点を含んではいるものの、現象学的運動学に不可欠な方法が明示されているとは言い難いであろう。よって、児童・生徒を具体的に指導する教員に対して、より分かり易く取り組める運動学を、研究方法を含め、新たに提示する必要がある。

この現象学的運動学を構築するためには、運動実践の基盤となる「身体運動の論理」を明確にし、さらにそれらを体系化しなければならない。なぜなら、身体の論理のみでは具体的な運動実践の独自性を明示できないからである。換言すれば、筆者はこれまで身体の論理、身体的思考の論理を下位〔動作〕や賢い［からだ］というキーワードと共に研究してきた。それらの研究との関連から、現在は現象学的運動学の提示が筆者の課題となっている。その運動学の重要な構成要素として「身体運動の論理」が明らかになることが必要不可欠なのである。

２．研究の目的

本研究の目的は、運動実践の現象学的分析によって、「身体運動の論理」を探り出し明示することである。身体運動を習得することは、ある意図のもとに、身体と外界との関係を築くことである。しかし、その関係は明らかにされてはいない。これを解明するために、運動実践に潜む身体運動の論理を、運動を実践している主体の側から分析する必要がある。それを可能にするが現象学的方法だと言えよう。よって、運動実践に潜む身体運動の論理を、現象学的分析によって探ることになる。本研究は新たな現象学的運動学の構想を具体化し、現実的な理論にするために不可欠な身体運動の論理についての考察であり、その論理を中核として、身体を教育するための現象学的運動学が明確になると考えている。

３．研究の方法

本研究の方法は、基本的には哲学としての現象学的分析を体育学における実践に適用できるように修正したものである。しかしながら、哲学においてもその方法は明確な形式として確立されているとは言えない。よって、哲学としての方法を体育という具体的現場を扱う方法として採用するために、方法自体の考察も本研究には含まれている。それと同時に、研究方法として本研究テーマに関する文献研究を行っている。

研究の手順は以下の通りである。基本的には、体育の授業現場で活用できる現象学的運動学を提示するという最終的な目標のために、運動実践を現象学的方法によって分析し、本研究テーマである「身体運動の論理」を探り出し明示する。それと共に、人間の運動に関わる現象学関連の文献や運動学関連の文献を中心に、文献研究を進める。各年度においては、次のようなテーマを設定し、その課題解決に向けて研究が進められた。

初年度（2016 度）は、哲学一般、現象学、人間学等の文献を研究することによって、人間学から身体運動とは何かを再検討する。それを背景に、「身体の論理」および「身体的思考の論理」を精緻化し、それとの整合性を図りつつ、現象学的分析により身体運動の論理の抽出を試行する。それと共に、体育学における現象学的方法自体の検討を行う。さらに、ミュンスター大学体育学部図書館（ドイツ）を訪問し文献研究を行う。その際に、Michael Krueger 教授と面談することによって、ドイツにおける学校現場での運動学について、情報の収集を行う。

２年目（2017 度）は、初年度の考察をもとに、引き続き文献研究と現象学的分析を継続する中で、人間が行う運動実践の独自性となる「身体運動の論理」を抽出する。特に実践独自の意図に関わる論理に注目する。さらにその論理の大まかな体系化を図る。その際、具体的な運動指導を行うことによって、その論理の検証を同時に行う。それまでの研究成果を国際スポーツ哲学会（英国開催）におい

て発表し、意見交換を行う。
　最終年(2018 年度)には、以上の考察から、身体運動の論理を明示し、他の論理との整合性を図る。それによって、体育現場で活用可能な、新たな現象学的運動学を提示する。その際、体育学独自の方法として、体育学としての現象学的方法をも明示する。このことによって、具体的運動指導の方法も明確になるであろう。

４．研究成果

(1) 平成 26 年度は次のように研究計画を立てた。①人間の運動に関する哲学的文献の研究を継続する。②現象学的運動学における身体運動の論理の位置づけとその概略について考察する。③それについて、第 36 回日本体育・スポーツ哲学会（筑波大学）で発表する。④ドイツ・ミュンスター大学での Michael Krueger 教授との面談を含め、同大学スポーツ科学部附属図書館で文献研究を行う。
　①については哲学一般、現象学、人間学等の文献研究を継続することによって、人間学から観た身体運動を再検討した。その検討を背景に、②については、概略的ではあるが、これまで研究してきた身体の論理および身体的思考の論理との範疇分けを明確化し、それらの関連づけを精緻化することを試みた。③運動の実践とは、外界との関係を構築した結果としての身体能力に基づいて、みずからの意図を実現することである。すなわち、肉体と身体、用具や他者を含めた外界、意図と身体的思考との関係から運動実践が成立している。その運動実践に潜んでいる論理性の概略、およびその論理解明が構想中の現象学的運動学においてどのように位置づくのかについて、平成 26 年に筑波大学で開催された第 36 回日本体育・スポーツ哲学会において「身体運動の論理性と新たな現象学的運動学」（単独）として発表した。さらに、これらの論理との整合性を図りつつ、現象学的分析によって人間の身体運動が保持している独自の論理性について考察した。また④については、身体運動の論理性を見出すために、その背景的研究としてミュンスター大学体育学部図書館（ドイツ）を訪問・滞在し、関連文献の収集・検討を行った。当該大学では、Michael Krueger 教授等と面談することによって、ドイツにおけるスポーツ教育学および運動学の動向、さらに学校現場での運動学について、意見交換及び情報の収集を行うことによって、研究状況を含め多くの情報を得ることができた。現象学的観点から運動について考察する文献はあるが、現象学的方法を意識的に適用して、運動実践から論理を探るという研究は見当たらないことが明らかになった。さらに、本研究課題と密接に関連する内容として、H.25 年度までの科研テーマに関して「『現象学的運動』論考 −身体を教育するための新たな運動学-」という題目で、体育・スポーツ哲学研究に投稿し、掲載された。

(2) 平成 27 年度は身体運動の論理を、これまでの筆者の研究テーマであった身体の論理および身体的思考の論理との整合性を図りつつ探求した。次のように計画を立て研究を進めた。①人間の運動に関する哲学的文献についての研究を継続する。②現象学的運動学において中核となる身体運動の論理について、身体の論理と身体的思考の論理との整合性を図りつつ考察し、運動実践に不可欠な論理として抽出する。③そのために、現象学的方法についても考察し、運動実践に活用できる方法として簡素化する。④その研究成果として、国際スポーツ哲学会において研究テーマである身体運動の論理に関連する発表を行い議論する。
　①については、主に意図について人間の運動実践に関わる文献を中心に研究を行った。②特に運動を実践する際に必要となる意図について、文献研究と実践的研究を踏まえ考察した。それによって、身体運動の論理および身体の論理との区分けがより明確になり、さらに身体的思考の論理との関係も明らかになった。すなわち、身体の論理は身体運動の論理の基盤であり、意図を含む身体的思考によって、個別的実践が成立することが明確になった。③現象学的方法についての文献研究を進展させ、身体運動学の方法として簡素化し整理することを継続した。それは身体運動を運動主体の側から考察する方法である。実践的な分析を行う中で、その方法が明確になりつつある。この方法については、体育現場で実際に運動指導する教員が活用できることを目指している。また④については、身体運動の論理についての研究成果と関連づけて、主に意図と運動実践を中心に、2016 年 9 月、英国の Cardiff Metropolitan University で開催された第 43 回国際スポーツ哲学会において、”What Sort of Intention is Required for Movement Practice? - A Investigation into the logic of human-bodily movement -“ という演題で発表し意見交換を行った。発表会場での議論だけでなく、さまざまな参加者と話す機会ができ、研究状況を含め多くの情報を得ることができた。また、同年 8 月に愛知教育大で開催された日本体育・スポーツ哲学会において、本研究の成果に関連づけて、「運動実践の哲学 -現象学的観点から実践を分析する- 」と題して、会長講演を行った。

(3) 平成 28 年度は研究計画の最終年度となるため、以下の事柄について研究を行った。継続的に、現象学についての文献研究、および運動実践における現象学的分析を行った。その分析結果を、これまでの研究成果と整合させつつ、身体運動の論理として抽出するために考察した。さらに、その論理の階層化と

体系化について考察した。同時に、本テーマに関する国外の研究状況について情報を収集し検討した。研究成果の公表については以下の通りである。8 月に大阪体育大学で開催された日本体育学会において、「運動を『する』から『つくるへ』 -身体運動の捉え直し-」という演題で研究発表を行った。さらに、9 月に千葉大学で開催された日本体育・スポーツ哲学会において、シンポジウム演者として「身体がもつ『独自の知』の体系」について発表し議論した。

本研究期間の終了に向けて、これまで身体運動の論理の体系化を目指してきたが、研究内容については現在まで断片的な発表にとどまり、原著論文としては公表できてはいない。しかしながら、マイネル運動学のドイツにおける現状は本計画初年度の渡独によって、研究者との対談及び文献研究をする中で、かなり明確に把握することができた。また、これまでの研究成果である現象学的観点ならびに方法を、実技授業における検討だけでなく、研究者に説明し伝達する機会を多く持つことができた。それによって、これまでの研究方法ならびに内容がより明確になった。

付言すれば、本年度末に提出した研究告書には、今回の研究計画の成果に加えて、本テーマに関連した文書を掲載している。一つ目の原稿は、小学校教員に向けた「器械運動の授業を変えてみませんか」という、出版目的で執筆したものである。これは「身体運動の論理」を枠組みとして、器械運動の捉え直しを行った内容である。共著としての出版の見通しが中断しているため、科研報告書に掲載した。二つ目は、大学体育実技の授業「身体と運動」で使用するための補助テキストを整理し、科研報告書に掲載した。三つ目は、これまで「身体運動の論理」に関連して作成してきた多くの図を、相互に関連づけながら補足・修正し、それらを纏めて報告書の巻末に掲載した。以上、当該報告書を参照して頂ければ幸いである。

(4) 本研究の目的は、運動実践を現象学的に分析することによって、体育に不可欠な「身体運動の論理」を明示し、さらにそれを体系化することであった。人間が日常の生活を含め運動を実践する場合には、概念的思考とは異質の身体的思考が不可欠であり、その論理を身体運動の論理は含んでいる。この論理は、通常では意識されない故に、具体的な運動実践な中から、現象学的方法を用いてそれを探り続けなければならない。この課題を解決することが、私の長期的な研究課題である現象学的運動学を構築することになる。この研究によって、その運動学の内実がほぼ整うと言えよう。

本研究を含め、これまでの研究計画の最終目標である現象学的運動学の提示については、その構想を原著論文として公表しているが、著書として全体を明確に提示することは課題として残された。しかし、どのように身体運動の論理が現象学的運動学に位置づくのかは明確になっている。さらに、その論理を抽出するために必要となる「体育学としての現象学的方法」も明確になりつつあり、その方法によって身体運動の論理自体も体系化の目処が立っている。これらの研究によって、身体の教育を目指した具体的指導との関連付けについても、見通しが立っている。これからも、体育学としての現象学的方法の確立および現象学的運動学の構築に向けて、地道に研究を進めるつもりである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１件）

滝沢文雄 (2014)、「現象学的運動学」論考－身体を教育するための運動学、体育・スポーツ哲学研究、Vol.36-1: 13-28（単著）査読有

〔学会発表〕（計　４件）

滝沢文雄,「身体運動の論理」序説－現象学的運動学の構築に向けて－, 平成 26 年度 日本体育・スポーツ哲学会（筑波大学）, 2014.08.20（単独）

Fumio TAKIZAWA, What Sort of Intention is required for Movement Practice? - A Investigation into the Logic of Human-Bodily Movement -, The 40th Annual Conference of the International Association for the Philosophy of Sport (Cardiff Metropolitan Univ., England), 2015.09.04（単独）

滝沢文雄, 運動を「する」から「つくる」へ -身体運動の捉え直し-, 平成 28 年度日本体育学会（大阪体育大学）, 2016.08.25（単独）

滝沢文雄, 身体がもつ「独自の知」の体系, 平成 28 年度 日本体育・スポーツ哲学会 シンポジウム（千葉大学）, 2016.09.10（単独）

〔図書〕（計　１件）

滝沢文雄 (2017)、身体運動の論理－運動実践の現象学的分析－、H.26～28 科学研究費補助金(基盤研究(C)) 研究成果報告書、総頁数 145

６．研究組織

(1)研究代表者

瀧澤　文雄（TAKIZAWA Fumio）
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：50114294